

自閉症概念の変容

—当事者の自伝や日誌を媒介にして—

松山大学大学院 渡邊文春

1 目的

専門家が、何らかの特徴を共有している人々を分類しようとするときに、分類するものと分類されたものが、相互に影響をおよぼす循環（ループ）を生じさせることを、イアン・ハッキングは知識の「ループ効果」と呼んでいる。今回の報告の目的は、このハッキングの「ループ効果」に依拠しながら、既存の自閉症概念によって分類された当事者が、自閉症概念と相互作用することを例証することによって、自閉症概念の変容を明らかにすることである。既存の自閉症概念は、医学の専門家による外からの観察によって構築されていた。既存の自閉症概念においては、米国精神医学会が用いる DSM-5 の診断基準の 1 つであるコミュニケーション障がい大きな特徴であり、その結果として対人関係の障がいがあると規定されていた。けれどもここでは、自閉症のコミュニケーション障がいについて、自閉症当事者の視点から論ずる。

2 方法

データとして自閉症概念によって分類された当事者 C 君の母親 M さんへのインタビューの語りと、母親 M さんの語りに登場する自閉症当事者である東田直樹の自伝を採用する。母親 M さんへのインタビューの経緯は、筆者と面識が無く障がい児を持つ家族に、当事者が生まれてからの家族関係について調査を実施したいと考え、障がい児を持つ知人に紹介をしてもらった。インタビューは、筆者が居住する地域から 1 時間半程離れた、当事者家族が居住する地域のカフェで 2 回実施した。

3 分析結果

母親 M さんは東田直樹の自伝を読むことで、重度の自閉症であっても、文章表現によって社会とのコミュニケーションが可能であることを知った。その東田は自伝の中で、人との関わり合いに関して、自分が感じたことを記述している。その内容は、自分は確かに他人から話し掛けられてうまく応じることはできない。けれども他人から話し掛けてもらうことを望んでおり、他人から声を掛けてもらうことがすごく嬉しい、というものであった。当初、母親 M さんは、東田を含む自閉症の人々がうまく話すことができないがゆえに、他人から話し掛けられても応じたくないのだと考えており、結果的に自閉症当事者は他人との関わり合いを好まないのだと理解していた。しかし母親 M さんは、自閉症当事者を外から観察して理解したと思い込んでいたことと、当事者が実際に考えていることとは、かなり隔たりがあることを、東田の自伝を読むことで知ったのである。

4 結論

今回の分析から、自閉症概念によって分類された当事者が、自分で経験した感覚に基づく理解を自伝や日誌で表現することで、「ループ効果」を通して既存の自閉症概念と相互作用していることがわかる。ここで専門家の理解と、当事者の理解との落差が軽減された。このように自分が所属する概念を書き換え直すという試みは、自己についての周囲の視点から理解されている事柄と、自己に対する働きかけ方とを改める試みである。

文献

Hacking I., 2009. *Autistic autobiography*, PHILOSOPHICAL TRANSACTIONS of THE ROYAL SOCIETY, B, 364, 1467–1473.